



実と剛「次男の選択」(2)

農家子弟の名門校

鶴岡市藤島地域にある庄内農業高は来年創立120周年を迎える。農家の子弟が目標にする伝統ある名門校で終戦直後までは「庄内農学校」と呼ばれた。日本の敗戦後、学制改革が行われ、昭和23(1948)年、新高校制度が開始された。櫛引地域出身で6年生生まれの富樫実は制度開始直前の23年3月に農学校を卒業した。

卒業生はそのまま就農する者がほとんどだったが、仏教彫刻に目覚めた実(母(みやま)の実弟・佐久間白雲の下で修業するため、岩手県大東町(現一関市)に旅立った。そこで経験したのが厳しい徒弟制度の中にある仏師



「空にかけける階段」千歳橋は平成13(2001)年12月に完成。バックの建物は鶴岡信用金庫本店

の世界だった。血縁がある分、逆に厳しくなった師弟関係。その中で黙々修業に励んだ。仏像の顔の表情に心血を注いだ。仏教観を磨き、一心に彫り、会心の観

音像が出来上がった…つもりだった。それを師匠の白雲に見せた。「何も心がこもっていないではないか」と即失敗作と断じられた。愛のムチであることは理解できた。ただ彫刻に集中すればするほど、「もっと自由な表現があるはずだ。造形も違う形があるはずだ」と大学に行つて学びたい思いが募った。葛藤を重ね受験を決断した。岩手3年目のころだ。そしていつたん櫛引に帰っ

てきた。志望先は京都にした。仏教彫刻も多く見られるからで、京都市立美術大(現京都市立芸術大)に絞った。

山添高に編入した

だが受験資格がなかった。農学校卒業だけではだめだったのだ。新制度移行があつて1年分単位が足りない。大学を受けて合格できるとかどうかも分からない。とにかく資格を取りたいと、地元(現山添高)に編入することを決意した。家族にも周囲にも美大志望はほやかした。

21歳の新高校生はこうして農繁期の昼は実家の手伝い。夕方から定時制の高校生活が始まった。夜は睡魔と戦いながら勉強した。布団の中に豆電球を隠してのものだった。部屋の電気をつけることに「電気代がもつたいない」と言われたからだ。それを見守る母もまたつらい日々だった。

「お前はどこかいい婿入り先を見つけてるか、農業者として独立すればいいの」

と息子に言い渡していた。

仏具店生まれだった自らのDNAが息子・実(まこと)に息づいていたのは母としても分かった。応援したい気持ちもあるが、一家の嫁の立場もあり、また次男として既に大きな働き手でもあった。農業に専念している長男の手前もある。大っぴらに応援するわけにはいかなかったのだ。

実自身、自分の立場もわきまえていた。美大受験のことも「何バカなことを」と一蹴されるのが落ちた。とにかく耐えて、自分の身になった。

道元像菩提寺に残す

○…仏師出身の彫刻家らしく実(まこと)は仏教彫刻も残して



曹洞宗の祖・道元像。写真IIは昭和38年に造られたもので、菩提寺・勝源寺(櫛引地域桂荒俣)の開山堂に納められた。また今年NHK大河ドラマの主役・明智秀木座像も妻熙子像ともども滋賀県大津市の西教寺に納めた。

を立てるしかなかった。

毎年6センチ伸びた剛

その頃、分家の剛少年は山添中学に入学したばかり。毎年6センチずつ身長が伸びる息子に母かつるは思案したが新しい学生服を用意する店に仕立ててもらった。しかし、中一でもどどん背丈が伸びる。せっかく新調した学生服は寸足らずになり、同じ頃、山添高に通っていた3歳上の長兄・勝が弟のお下がりを着るようになった。

剛の学生服着用受験

実は14カ月の山添高の授業を修了させ、28年3月1日、受験のため京都に向かった。その時「勝、おまえの学生服をオレに貸してくれ」と申し込んだ。通学時は決まって作業着。周りもそうだったし、庄農時代の学生服はどこかに行つた。受験ぐらいいは「正装で」という気持ちだった。最初剛が着ていた物を巡り巡って着用することになった。

当時の身長1.75。学生服の袖はやや長かったが、折り返したらさまじくなった。無事受験は終了したが直後の京都でショックな出来事が待っていた。|| 敬称略 ||

(富樫 嘉美)

毎週火曜日付に掲載